

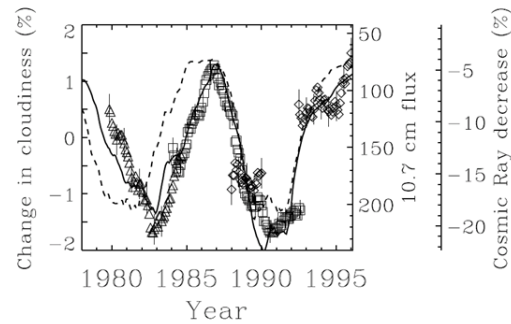
Skepticism(温暖化懐疑論,2000年代に一世を風靡,最近は下火? 2017年07/16記す)

丸山茂徳氏らの主張(文藝春秋2008年5月号,2008年日本地球惑星科学連合大会,「21世紀は温暖化か寒冷化かのセッション」)ほかに賛同者が赤祖父俊一(オーロラ学),戎崎俊一(高エネルギー天文学)

- ・IPCCの科学的根拠には重大な間違いがある.
- ・最近の地球温暖化は間違いがない.しかしその原因は人間の出すCO₂ではなく,自然現象である.
- ・気温(気候)は<雲量,太陽放射,温室効果ガス(H₂OとCO₂),ミランコビッチサイクル>などの複雑な関数.
- ・この中でIPCCはCO₂のみを気温変化の原因と考えている.
- ・丸山氏は,この中で雲量の影響を強く主張する.
- ・宇宙物理学の方から,地球が受け取る銀河宇宙線量の変動しているというデータがある.
- ・またそれが地球上の雲量(とりわけ下層の雲)ときれいな相関があるという主張(H.Svensmark, E.Friis-Christensen, J. Atmos. Solar Terr. Phys. 59, 1225 (1997).

<http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~shwlab/seminar/nucleation/resume/070223/>

[Cosmic-rays.pdf](#)



雲量の変化率(図形)と宇宙線の流入量の変化率(実線)と太陽東(破線)の相関関係。雲量データのうち、三角形は、Nimbus7のデータ、四角形は、ISCCP C2とISCCP D2のデータ、菱形は、DMSPのデータである。[H. Svensmark, Influence of cosmic rays on Earth's climate]

(上記図と説明:<http://www.teamrenzan.com/archives/writer/nagai/cycle.html>より)

右の図は世界の表面気温の変化で,これを見ると1940年から1980年にかけて気温が低い状態が続いている.IPCCはこれを工場のばい煙による遮蔽効果などと説明している。

・さらに古気候分析で,隕石の照射宇宙線の研究から,古気候と銀河宇宙線強度の間に強い相関があるという論文が出る(これは岡本の註.)

<GSAToday(アメリカ地質学会広報紙)での論争>

顕生代(古生代以降)の気候変動がCO₂ではなく天体からの宇宙線の量に支配されるという論文(PDF)

[Celestial driver of Phanerozoic climate? Nir J. Shaviv and Ján Veizer\(2003\)](#)

それに対する「いややはりCO₂だ」という反論(PDF)

[CO₂ as a primary driver of Phanerozoic climate Dana L. Royer, Robert A. Berner, Isabel P. Montañez, Neil J. Tabor, and David J. Beerling\(2004\)](#)

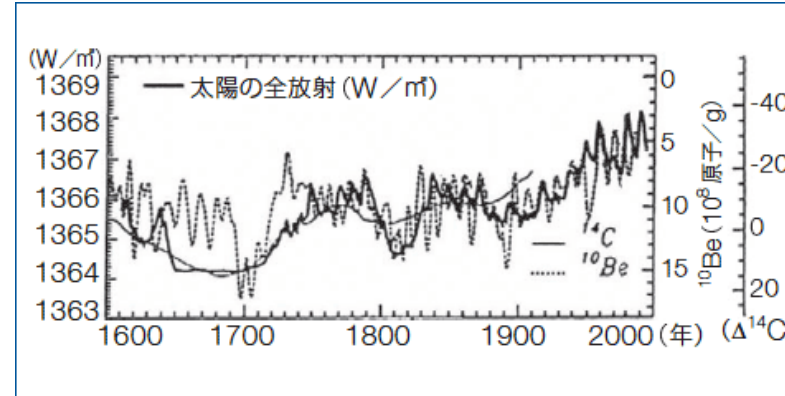
・地球の磁場が弱くなりつつある傾向が見える。(磁場が弱くなると宇宙線が増える)

・●太陽活動が活発化

http://www.nikkeibp.co.jp/style/eco/special/070803_warming4/index3.htmlより

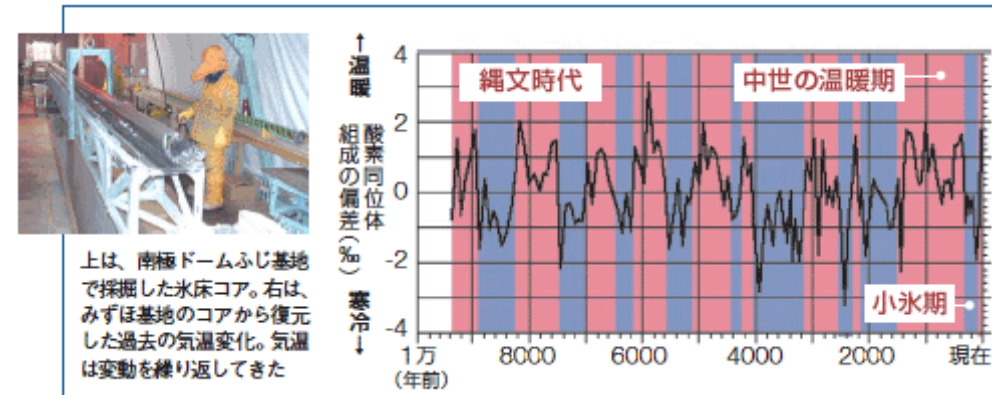
太陽は11年周期で黒点の数が変わる。1950年以降,太陽活動は活発化し,現在は1000年に1度の活発な時期にあり,様々な形で温暖化に寄与する

出所/Kevin D. Pang, Eos, Transactions, American Geophysical Union, vol. 83 No.43, 22 Oct. 2002



●縄文時代以降の気温(上記URLより)

出所/国立極地研究所と東北大学の分析によるデータ



●気温が先なのはなぜか

ハワイのマウナロア山と南極で測定されたCO₂濃度の平均値と世界平均気温。毎年の変動だけを見た 出所/C.D. Keeling, Geophysical Monograph55(1989)210

